

# 駿河台大学資格課程年報

*Surugadai University*  
*qualification course annual report*

司 書 課 程  
学 芸 員 課 程

No.23  
(2022)



# ごあいさつ

駿河台大学資格課程 主任 野村 正弘

『駿河台大学資格課程年報』第23号をお届けいたします。

1994年3月に駿河台大学文化情報学部が創設され、1995年4月に、文化情報学部資格課程（司書課程・学芸員課程）が設置されました。開設7年目の2001年に『駿河台大学資格課程年報』創刊号を刊行しました。そして、その後も継続して年報を刊行し、今年度も無事に第23号を刊行することとなりました。

司書課程においては、資料情報の組織化及び検索・提供を行う司書の育成を行っています。文字情報だけでなく、映像や音響も含めた多様な情報に対する理解や対処ができる、まさに情報の専門家の役割を果たす人材の育成をめざしています。

学芸員課程においては、博物館資料の展示・教育活動等の情報社会における意義・役割を重視したカリキュラムを設置し、資料情報のデータベース化やインターネット上での公開などの情報処理技術を身につけた新しい学芸員の育成をめざしています。

2009年度には『メディア情報学部』が誕生し、駿河台大学資格課程は同学部に設置されています。さらに、資格課程はメディア情報学部のほか、法学部・経済経営学部・現代文化学部・スポーツ科学部・心理学部の学生も学ぶことができます。2013年度からは、図書館法および博物館法の改正に伴い、それに沿った新しいカリキュラムが開始されています。

新型コロナ禍も下火になり、多くの授業が対面に戻りました。資格課程授業での感染拡大も無く、1年間を終えることができました。ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

また本学では、学外実習が始まった当初から教員がそれぞれの実習館を訪問し、実習生を受け入れてくださっている博物館とのコミュニケーションを図ってまいりました。今年度も新型コロナ禍のなかで本学の実習生を受け入れていただき、ご理解・ご協力いただいた館園には、厚く御礼申し上げます。この年報を通して本学の資格課程カリキュラムの内容をご確認いただけましたら幸いです。



# = 目 次 =

ごあいさつ	野村 正弘
I. 司書課程	
駿河台大学 司書課程について	石川 賀一 …… 6
II. 学芸員課程	
駿河台大学 学芸員課程について	野村 正弘 …… 10
《博物館訪問記》 草加市立歴史民俗資料館訪問報告	小俣 謙二 …… 13
《博物館実習 体験記録》 博物館実習を終わって —レポートから—	博物館実習生 …… 14
資 料	
博物館実習協力館および受入人数一覧（過去3年分） 2020年度、2021年度、2022年度 2022年度資格課程（司書課程・学芸員課程）修了者 司書課程科目担当教員一覧 学芸員課程科目担当教員一覧	



# I . 司書課程

---

---

# 駿河台大学 司書課程について

メディア情報学部 講師 石川 賀一

---

## 司書課程の特色

駿河台大学では1994年文化情報学部創設の翌年に資格課程として司書課程と学芸員課程を設置し、これまで1,200名以上の資格取得者を輩出している。2001年度より資格課程は全学に開かれ、他学部の学生も履修できるようになった。

2009年に文化情報学部はメディア情報学部改編された。メディア情報学部は、3分野・7つのモジュールで構成されており、様々なメディアの本質を理解し、各種メディアに精通し、多元的メディア社会に即戦力となる人材の育成を目標としている。

司書が専門的な業務に従事する図書館には、公共図書館・学校図書館・大学図書館に加えて、企業等に設置されている専門図書館や情報センターがあり、それぞれの利用者のニーズに応じて様々な情報サービスを提供している。駿河台大学の司書課程では、メディアと情報資源に関する全般的な学びをベースに資格取得を目指すことから、図書館はもちろん、広い分野において、多様な情報資源を活用し様々な課題解決を支援することができる人材の育成に努めている。そのため、司書科目だけではなく、受講生自身が自分の強みとしたい分野の科目についても、積極的に履修することを勧めている。

## 司書課程 4年間の流れ

司書課程科目は1年次から開講されている。資格取得には、4年次までに「司書課程科目」で定められた科目を計画的に履修し、単位を修得することが求められる。ここでは2021年度以降の入学生を例に、4年間の履修の流れを紹介する。(司書課程科目一覧を参照)

**1年次：** 入学してすぐに資格課程登録ガイダンスを受講し、期日までに『資格課程受講登録』を申請する。1年次から開講される「図書館情報学」、「図書館サービス概論」、「図書館情報資源概論」の必修3科目を履修し、単位を修得する。

**2年次：** 2年次から開講される「生涯学習論」、「図書館情報技術論」、「情報サービス論」、「情報資源組織論」、「児童サービス論」の必修5科目を履修し、単位を修得する。選択科目も適宜履修し、単位を修得する。

**3・4年次：** 3年次から開講される「図書館制度・経営論」ならびに演習科目である「情報資源組織基礎演習」「情報サービス基礎演習」の必修3科目を履修し、単位を修得する。また選択科目を適宜履修し、司書資格取得に必要な単位(必修22単位を含む26単位以上)を満たす。

司書課程科目一覧（2021年度以降入学生適用）

区分	図書館法施行規則によって定められている科目	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数	
必修科目	甲群	生涯学習概論	2	生涯学習論	2	2	11科目 22単位 必修
		図書館概論	2	図書館情報学	2	1	
		図書館制度・経営論	2	図書館制度・経営論	2	3・4	
		図書館情報技術論	2	図書館情報技術論	2	2	
		図書館サービス概論	2	図書館サービス概論	2	1	
		情報サービス論	2	情報サービス論	2	2	
		情報サービス演習	2	情報サービス基礎演習	2	3・4	
		図書館情報資源概論	2	図書館情報資源概論	2	1	
		情報資源組織論	2	情報資源組織論	2	2	
		情報資源組織演習	2	情報資源組織基礎演習	2	3・4	
		児童サービス論	2	児童サービス論	2	2	
選択科目	乙群	図書館情報資源特論	1	情報資源組織発展演習	2	3・4	2科目 4単位 以上
			1	デジタル・アーカイブズ論	2	3・4	
			1	歴史資料論	2	3・4	
	1	図書館サービス特論	1	コミュニケーション論	2	2・3	
		1	情報サービス発展演習	2	3・4		
	1	図書館基礎特論	1	情報処理概論	2	1	
1	図書館総合演習	1	図書館総合演習	2	3・4		



## II. 学芸員課程

---

---

# 駿河台大学 学芸員課程について

メディア情報学部 教授 野村 正弘

---

## 学芸員課程の目標と経過

駿河台大学の学芸員課程は、メディア情報学部設置されている。メディア情報学部の教育目標の一つは、「情報メディアエーター」の養成である。この「情報メディアエーター」とは、人間の文化的営みに関する諸々の資料などに関する専門的知識を持つとともに、これらの資料情報をシステム化し、データベース化するための情報処理技術を身につけ、これらの資料に関する要求に対して適切な情報提供の仲介を行う専門家のことである。文化資料の宝庫とも言える博物館の「情報メディアエーター」とは、その能力をもつ博物館学芸員を意味する。

この目標を達成するため、メディア情報学部の前進である文化情報学部のカリキュラムには、学部設置当初から博物館関係の科目が設けられた。1995年、博物館法施行規則にもとづく学芸員資格取得のための必要科目も開設された。また同年、学芸員課程と司書課程を合わせた「文化情報学部資格課程」が設置され、専門的知識と情報処理技術を身に付けた学芸員の養成が本格的に開始された。

その後、1996年の博物館施行規則改正に伴い、1997年度から必修科目が開講されている。2001年度には、他学部の学生や学外の科目等履修生も学芸員の資格取得を目指せるように、学則および科目の一部を改正した。資格課程も学部規模から大学規模に拡大され、現在は全学部からの委員で構成される「資格課程委員会」がその運営に当たっている。

## 学芸員課程の履修科目

1995年の開講時には、必修科目として6科目14単位、選択科目では12科目の中から4科目8単位以上、人文・自然科学系科目として10科目の中から3科目6単位以上の履修が資格取得に必要なように設定された。

1996年度の博物館法施行規則の改正にもなっており、必修科目に「生涯学習概論」、「博物館概論」を追加し、必要単位数を8科目18単位とした。さらに、2001年度から、文化情報学部のカリキュラムの一部改正、ならびに資格課程を本学の他学部、科目等履修生に開講したことにとともに、一部科目の新設ならびに入れ替えを行って、学芸員資格取得に必要な科目を加え改正した。

主な変更点は、次の通りである。必修科目では「博物館資料論」を設け、選択科目では科目を一部入れ替えるとともに、他学部開放にとともに人文・自然科学系科目をA、Bの二つに分け、それぞれⅡ群、Ⅲ群とした。履修方法は、Ⅰ群は、受講者全員が履修することとし、Ⅱ群、Ⅲ群の科目からは2科目4単位以上を自由選択により修得しなければならないことにした。また、「博物館実習」は、年間を通して大学で行う学内実習と博物館などの現場施設で行う学外実習を合せて実施している。

2013年度からは博物館施行規則改正に伴う新科目の開設を行い、2017年度からは、配当年次、選択科目の見直し等を行い、資格を取得しやすくした。2021年度からは全学の教養科目の見直しに伴って人文・自然科学系科目を見直し、別表1のカリキュラムでの学芸員養成を開始している。

## 履修登録および博物館実習への対応

学芸員課程の履修については、毎年、「資格課程履修ガイド」を発行し、学生に配布して周知を図っている。これに基づく年間スケジュールでは、まず、毎年4月、1年次生および3年次編入生を迎えた段階で、司書課程と合同で「資格課程登録ガイダンス」を行い、その後、学芸員課程の履修を希望する学生は、登録期間内に本学の所定の方法にしたがって教務課窓口で登録することになっている。

博物館実習については、3年次生を対象に、毎年11月中旬に第1回のガイダンスを行い、博物館実習の実施内容や実施上の注意事項を改めて説明している。そのとき、実習館園に関するアンケート調査を行い、その後のガイダンスで担当教員と学生が相談しつつ実習希望館園を絞り、適時学生白身に申し込みをさせている。その後も、申し込みの状況や途中経過などを確かめ、およそ3月～4月末までに学生各白の実習館の内諾をいただけるようにしている。内諾をいただいた実習予定館園に、正式に文書で依頼している。

実習直前には、実習予定学生に対して「実習直前ガイダンス」を行っている。ここでは、博物館実習は、実習実施に当たっての諸注意や期間中の連絡体制等を説明し、実習日誌などを配布して、実習の心構えと準備を整えさせている。博物館実習の授業内では、実習に対する心構え、事前準備などの事前指導を行っている。実習が始まると、担当教員ができるだけ実習期間中に各実習館園に挨拶に伺って、実習状況の確認と実習学生の激励を行い、以後の学生受入についてお願いしている。また、実習終了後には事後指導を行い、学芸員の職務を再確認させ、学芸員になるための一層の努力を促している。なお、資格課程に関わる一連の事務は、メディア情報学部担当の教務課職員がその処理に当たっている。

## 学芸員資格課程の今後

1997年度に初めて、本学の学芸員資格課程で86名が学芸員の資格を取得したが、2013年度の法改正後は5～6名の学生が資格を取得している。ここ数年は10名程度と微増傾向にあるが、これまで博物館に就職した者は数名にすぎない。学芸員募集には、募集分野の細分化や高学歴化の傾向、施設運営の指定管理制度導入の影響が見られ、資格を持ちながらそれを活かす職に就けない状況が続いている。これは本学資格課程だけの問題ではなく、学芸員課程を開設している日本全国の大学に共通な問題である。

一方、学芸員資格は国家資格であるため、これを取得したことを重視して採用を行ってくれる企業も、多くはないものの存在する。そこで本学では、博物館実習を一種のインターンシップの場としても捉えている。幸い、実習博物館でも、実習学生の受け入れを社会教育施設の業務の一つであると解して協力してくれるところもあり、今後大学と博物館とのさらなる連携を推進して行く必要がある。

2022年4月に博物館法が改正となり、目的に「文化芸術基本法に基づきこと」、「博物館資料のデジタル・アーカイブ化」が追加された。他の博物館との連携、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など地域の活力の向上への寄与が努力義務化にもなった。このような変化に対応するためにも、カリキュラム・教授内容を再検討して社会が必要とする学芸員の養成を行っていく必要がある。

別表1 学芸員課程科目一覧 (2021年度以降入学生適用)

区分	博物館法施行規則によって定められている科目等	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数
必修科目	生涯学習概論	2	生涯学習論 ※1	2	2	10科目 20単位 必修
	博物館概論	2	博物館概論	2	1	
	博物館経営論	2	博物館経営論	2	2	
	博物館資料論	2	博物館資料論	2	2	
	博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	3 4	
	博物館展示論	2	博物館展示論	2	2	
	博物館教育論	2	博物館教育論	2	2	
	博物館情報・メディア論	2	博物館情報・メディア論	2	3 4	
	博物館実習	3	博物館実習Ⅰ	2	4	
博物館実習Ⅱ			2	4		
選択科目	資料・情報管理系科目	マルチメディア論	2	1		
		アーカイブズ学	2	3 4		
		音響メディア論	2	2		
		データベース設計論	2	3 4		
		ネットワーク構築論	2	3 4		
		デジタル・アーカイブズ論	2	3 4		
		歴史資料論	2	3 4		
	人文・自然科学系科目	文化人類学 A	2	1 2		
		文化人類学 B	2	1 2		
		歴史学 A	2	1 2		
		歴史学 B	2	1 2		
		環境生物学 A	2	1 2		
		環境生物学 B	2	1 2		
		生命の科学 A	2	1 2		
		生命の科学 B	2	1 2		
		現代科学 A	2	1 2		
		現代科学 B	2	1 2		
		地球科学	2	1 2		
		日本伝統文化論	2	2 3		
		世界遺産論	2	2 3		

※1 スポーツ科学部の学生は「生涯学習論」は3年次からでないと履修出来ません。

草加市立歴史民俗資料館訪問報告

心理学部 教授 小俣 謙二

2022年8月24日(水)に草加市立歴史民俗資料館に、浅川弘佳さんの博物館実習について訪問した。草加市立歴史民俗資料館は、およそ200点の民俗資料を展示している。たとえば市指定有形文化財(「綾瀬川(旧新田村)出土丸木舟」)や江戸時代の草加宿や草加松原に関する資料を展示している。筆者も細川館長の案内で展示物を見てみたが、筆者のような高齢世代には懐かしい農機具や煎餅の製造道具などが展示されており、興味深かった。このほか、季節ごとに草加地域の歴史文化や節句行事をテーマにした企画展を始め、様々なイベントも開催しているという。

実習生は浅川さんのほかにも他大学の学生4名がいた。筆者が訪問したときは全員で展示物の整理をしていた。浅川さんとは実習時の作業内容などについて説明を受けた。細川館長は気さくな方で話好きのようで、訪問の時間の多くは細川館長との話であった。話の中では、当館の設立経緯やその際の苦労話などを伺った。館長による浅川さんの評価は「熱心に実習に参加しており、他の実習生とも仲良く作業をしていて好感の持てる」学生というものであった。

今後の浅川さんの活躍に期待したい。

浅川さんの実習にあたり、ご指導いただいた細川館長と戸張様はじめとする草加市立歴史民俗資料館の職員の方がたに感謝したい。また、本学の資格課程ご担当の先生方、事務職員の方々にお礼を申し上げる。



写真(いずれも) 草加市立歴史民俗資料館 ホームページより

博物館実習を終わって ―課題レポートから―

〈総合博物館での実習〉

入間市博物館 ALIT

経済経営学部経済経営学科 4年 松田 拓海

7月23日から8月6日の期間で12日間、埼玉県入間市の入間市博物館 ALIT にて実習をさせて頂いた。入間市博物館は、科学、入間の自然や歴史の他に、「茶」という日本でも有数のお茶の博物館として活動している総合博物館である。また、平成30年度から指定管理者制度を導入している。ALITとは市民の案から選ばれた博物館の愛称で、Art・Archives、Library、Information、Teaの頭文字を組み合わせたものである。美術館的機能や文書館的機能、ライブラリー機能を併せ持ち、地域の情報センターを目指し、狭山茶の主産地である入間市博物館ならではの愛称となっている。

実習初日は、午前にはオリエンテーションと博物館内の見学をした。実習期間は実習生が毎朝、収蔵庫や展示室の温湿度計のチェックをし、適切であるか確認することが日常業務となった。午後は、石臼の洗浄や書物やお茶の資料等の博物館資料の乾拭き・水拭きといった清掃を行った。また、博物館の資料収集と整理・公開についての講義を受けた。博物館資料はどこまで受け入れるかが悩ましく、「入間市民の役に立つか」を考え資料の収集を行っているそうだ。

2日目は、館庭の保存林で雑草の伐採を行った。自然科学を保存して残すことも博物館の仕事の一つで、大量の雑草を伐採し終わると、絶滅危惧種であるキツネノカミソリの蕾が2つ現れた。達成感と共に実習生のチームワークや絆が深まったと感じた。次に博学連携について学び、小学校3年生に向けたオンライン授業の模擬発表を行った。意見を出し合い、緑茶、紅茶、烏龍茶の違いといったお茶についての授業を行った。私は告知を担当し、実習生や学芸員の方に、本職の学芸員のような伝え方だったと褒めて頂いた。しかし、説明した際に話した「行程」を「流れ」に、「先程」を「さっき」と、対象年齢に合わせた言い回しや柔らかい表現に変更することで、より子供たちに伝わりやすかったのではないかという反省点もある。

3日目は、一般収蔵庫と文書収蔵庫の清掃を行った。文書収蔵庫では、火災がおきた際、水ではなく二酸化炭素を使い、資料を濡らすことなく鎮火するそうだ。収蔵庫には重量の重い資料も多く、運搬が大変なため、清掃となると人数も時間もある程度必要であるが、平日頃の清掃や点検が大切であると実感した。

4日目は、文化財の保存と活用について学び、午前は、平成13年に国の登録有形文化財となった、旧石川組製糸西洋館の見学と、一般公開に向けた草刈りを行った。午後は、市の指定文化財である旧黒

須銀行の見学と、入口の石磨き等の美化作業を行った。2つの文化財の美化活動に携わり、文化財の保存に協力できたのは光栄である。文化財を未来に残していくためにもなくてはならない活動であった。また、ボランティアの方も多く参加しており、市の人々で文化財を守っているように感じた。

5日目は、資料のクリーニングを行い、民俗資料について学ぶ一環として、練炭コンロのスケッチを行った。民俗資料は基本的に入間市で使用されていたものを集め、今回スケッチした練炭コンロは、模様等から養蚕が盛んだった時代、寒さで動かない蚕を暖め、活性化させるために使われていたのではないかと分析した。

6日目は、埋蔵文化財保存準備室の見学と草むしり等の美化作業を行った。発掘に使う道具や発掘された土器等の遺物が沢山保管されていた。また、土器の破片の洗浄を体験した。歯ブラシを使い、水で優しく泥を落としていくと、土器本来の模様が現れた。沢山の土器を洗浄し、少しずつ細かい欠片を繋ぎ合わせ修復していく作業は大変であろう。午後には、抹茶のサンプルの交換をする展示方法を教えて頂いた。抹茶は15日程で変色してしまうため取り替える必要があるそうだ。サンプルを展示する際も、本物のお茶を入れる時のように漉す必要があり、ダマができないようにする。そして、お茶を器の中央に盛り、器の縁を叩いて自然に皿に広がるようにしていくと綺麗に展示できると学んだ。

7日目は、「ポケット学芸員」という、スマートフォンアプリの音声展示ガイドのナレーションを行った。資料の使い方を知らない人でも使い方をイメージしやすいように心がけ、文章の作成にあたった。資料に実際に触れ、観察することで、より聞き手に伝わりやすい文章を考えることができたと思う。録音した音声はすぐに掲載され、自分の声を通して、展示物を紹介することができとても喜ばしい気持ちだ。

8日目は、特別展示室で開催する「平和祈念資料展」の準備を行った。学芸員の方に展示の際に心がけていることを質問したところ、凸凹を付けたレイアウトにより、動きを付け、視覚的にも楽しい展示にし、見る人の気持ちになって、自分の訴えたいことが良く伝わるような、美しい展示にしたいと話していた。私も展示のレイアウトを考える際は凹凸を意識し、動きができるよう考えたいと思う。

9日目は、燻蒸資料の搬入を行った。入間市博物館は二酸化炭素燻蒸を用いる燻蒸方法で、銀色のシーツのテントを建てる包み込み式の燻蒸である。私は沢山の資料をテントの中に運んだ。燻蒸作業に携わることができ、とても貴重な体験であった。

10日目は、茶室である「青丘庵」で茶会の準備と掛軸の実習を行った。茶室ならではの作法や道具の意味を詳しく教えて頂き、茶の奥深さを学ぶことができた。

11日目は、「こどもお茶大学」という小学生に向けたお茶についての講座や、茶葉の手揉み体験といったイベントの運営補助を行った。準備や受付、お茶の配膳等、イベントを成功させるために奮闘した。手際よく対応することができたが、子供達との会話が少なかったため、積極的に話しかけるべきであったという反省点がある。

最終日は、広島で原爆を体験された方が語られる「平和を考える講演会」に出席した。身近な人の病气や死等、原爆の悲惨さをリアルな体験談で拝聴することができ、争いは何も生まず、人を傷つける人になってはいけないと改めて実感した。今一度、平和について考える機会を提供することのできる博物館という場は素晴らしいと感じた。

これらの実習を通して、私が当初想像していたよりも学芸員の仕事は力仕事が多く、お客様を相手に

する対外的な仕事から、事務や資料整理といった内部作業と、多岐にわたることが分かった。博物館での実習はどれも大学では体験できないような貴重な日々であり、多忙な中、実習を受け入れてくださった入間市博物館の方々に改めて感謝の意を伝えたい。



写真1 平和祈念資料展の展示作業の様子



写真2 燻蒸資料の搬入の様子

---

## 埼玉県立川の博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 金澤 真仁

私は2022年7月30日（土）から31日及び8月3日から7日の計7日間、埼玉県立川の博物館で博物館実習をさせていただいた。埼玉県立川の博物館は「川と水と人々の暮らし」をテーマとした河川系博物館であり、1997年8月1日に開館した。主に博物館の隣を流れる荒川に関連する資料や川に関する物品などを収集している。それらを用いた教育普及活動に力を入れている博物館である。また博物館の敷地内には日本一の大きさ誇る巨大な大水車や荒川わくわくランド（ウォーターアスレチック）や荒川を1000分の1の縮尺で再現した日本で最も大きい屋外模型である荒川大模型173など複数の川や水に関連した施設がある。

実習をさせていただいた7日では、在籍学芸員による教育普及活動事業（かわはく体験授業）の紹介及び体験、在籍学芸員の専門分野の実習、資料取り扱い、IPM（総合的有害生物管理）、収蔵庫整理、収蔵品の調書作成、梱包実習、企画展見学、教育普及活動受講体験、オリジナル展示解説発表など様々なことを体験させていただいた。事前に博物館実習の授業で習っていた内容が多く、習ったことと実際に行われていることの似ている点や異なっている点などをしっかりと認識することができた。

実習初日は企画展「海なし雪なし火山なし ーないけどある！埼玉との深い関係ー」が開催されてい

たため、博物館施設の見学をした。また午後は川の博物館の沿革や台風19号直撃に伴う荒川氾濫による浸水被害等の解説を受けた。

2日目は収蔵庫見学とIPM（総合的有害生物管理）、収蔵品の調書作成を行った。川の博物館の所有する収蔵庫は埼玉県立自然史博物館と共有しており、荒川に関連する収蔵物のほかに多くの自然系の収蔵物があった。またIPM（総合的有害生物管理）のための調査トップの交換を行った。収蔵庫は搬入口と隣接しており虫が多く侵入しているとのことであったがあまり害虫が侵入している形跡がなく、きちんと収蔵庫の二重扉が機能していることが分かった。その後、博物館での重要な業務である調書作成を行った。他の博物館との連携事業や収蔵品の貸し出しの際にされる作業であり、授業で習っていない内容であったためとても興味深い体験をすることができた。

3日は調書作成と梱包作業の実習を行った。綿布団、うす半紙等を用いて事前に習ったように梱包を進めていたが、思うようにうまくいかずかなりてこずることとなった。実習を担当してくださった学芸員の羽田さんからはあまり気負わずに実習をしてほしいとは言われたものの、梱包は自分ではうまくできる部類であると自負していただけにとっても悔しかった。

4日目は川の博物館に在籍していた学芸員の森さんより体験授業をうけた。また川の博物館が行っている体験型の教育普及活動である「かわはく授業」を体験した。更に博物館の重要な要素であるパネルの作成体験も行った。森さんからは土壌学に関する授業を受けた。土壌動物抽出装置（ツルグレン装置）を用いて土壌内の生物の観察や剥ぎ取り標本を用いた土壌からその土地の変遷などを推測するなどといった内容であった。地質に関する授業は高校生以来であったためとても興味深い体験をすることができた。また「かわはく授業」では荒川大模型173を用いた授業体験を受けた。説明する内容や来館目的などを加味して授業内容を考慮して変更するといったアドバイスは最終日で行われたオリジナル展示解説をするうえで大いに役に立った。

5日目は4日目に引き続き「かわはく授業」の体験を受けた。実際に荒川に入り生物や河原の様子の観察などを行った。体験することに対して重点を置いている川の博物館ならではの内容であり、子供だけではなく大人も楽しめるように工夫されている内容であった。

6日目は4日目に体験した荒川大模型用いた展示解説を参考にして自分たちでオリジナルの展示解説を作成するようにとの課題が出されたためそれに取り組んだ。他大学から来ている実習生と協力して作成することとなった。最初は戸惑ったものの各々が持っている知識を出し合い協力して展示解説の作成や使用する小道具等の準備を進めることができた。

最終日の7日目は作成したオリジナル展示解説を行った。自分の今までに学んできた知識を最大限に活用し、分かりやすく興味を惹かれるような展示解説を作成した。直前の順序変更やアドリブなどを交えつつ他の班に見劣りのないような発表にできたと思われる。

川の博物館では実習でなければ体験することの出来ないことが多くあり、非常に貴重な経験となった。博物館の内部の様子や学芸員の実際の業務内容などは大学で学んだ内容に対しより一層理解を深めるきっかけになった。

体験することに重点を置く川の博物館の姿勢は大いに共感でき、通常の博物館とは一線を画す展示形式は教育普及活動において多くの利点をもたらすものと考えられる。そのような博物館で学んだ経験は

様々な場所で活用することのできるものだと思うのでこれらの経験は大切にしていきたいと思った。



写真3 展示解説発表



写真4 梱包実習の様子

---

## 埼玉県立川の博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年

私は埼玉県立川の博物館で7日間の実習をさせていただいた。川の博物館は、「埼玉の母なる川—荒川—を中心とする河川や水と人々の暮らしとのかかわり」というテーマを、体験学習を通して理解してもらうことを目指している博物館だ。ウォーターアスレチックや、水車小屋の復元展示、大水車、荒川大模型、アドベンチャーシアター等の体験型施設が充実しており、子供連れのファミリー層の利用が一番多かった。実習内容としては、収蔵庫内でのIPMの体験、資料の調書作成及び梱包、パネル作成、教育普及事業である荒川の調査や河岸段丘ツアーなどの体験、オリジナルの荒川大模型の解説作り及び発表などを体験した。

### 【3度の浸水被害】

川の博物館はこれまで3度、目の前を流れる荒川の増水による浸水被害に遭い、設備が故障したり橋が流されたり等の影響があったとお話を伺った。しかしその状況を逆手にとって、川の増水していく様子を記録し、川のはたらきの証拠になるような写真を撮って資料にするなど、博物館としての危機を有用な機会としてしまう研究熱心さと切り替えの早さに驚いた。

### 【教育普及事業】

川の博物館は資料の収集保管は少ないが、教育普及事業に力を入れている。学校対応では、主に①水生生物の観察②荒川の石や植物③川の水質調査④ガリバーウォーク（荒川大模型の解説）などの授業を

年 100 回ほど行っており、その力の入れようが伺える。

一度ガリバーウォークを見せていただいたが、対象が小学生か、どこから来たのか、川に詳しいご高齢者かなど、対象がどのような人かによって話す内容が変化し、学芸員の知識の引き出しの多さに感服した。

出張授業では、行う学校に合った内容にするため入念な下調べを行う場合もある。それによって学芸員の知識が増えたり、知り合いが増えたりなど、教育普及事業も与えるばかりではなく、博物館側にもメリットがあることを知った。

#### 【調書作成・梱包作業】

資料を傷つけない為にアクセサリやネームプレートもすべて外して作業を行った。必ず両手で丁寧に持ち、下を見るときも裏返さず高く掲げない、むやみに持ちすぎないなど、触るほど壊れる可能性が高まるため、気を付けるべき点を沢山教わりながら行った。

ひび割れ、シミ、シールの跡や、プラスチックなら劣化の可能性も考えて色も記録に残すなど、様々な視点から資料を観察し記録していく。調書作成は基本的に、資料の貸し借りの際に借りる側の館が行うもので、貸す側の館にとっては相手を信頼できるか確認するための作業でもある。資料はどれもまったく異なった特徴を持つため、適確に手早く行うには沢山の経験を積む必要があると感じた。

梱包作業では、大学で学んだ方法とは別の方法を教わった。

大学で教わったやり方は、運搬中兎に角壊れないための梱包で、開梱の際は鋏で切ることを前提としたやり方であった。川の博物館での梱包方法は、開梱の際にも壊れる可能性を下げるために開けやすく分かりやすいことを重視した梱包であった。

資料を薄羽紙で保護した後、布団を写真の通り井の字になるように結んだ。縦横二本ずつ結ぶことで隙間から資料が出てしまうこともなく、回転させずに開梱できるため、壊れる可能性が減る。瓶の梱包では本来立ててあるものを寝かせて梱包するのか立てたままの姿で梱包するのか、開閉できるものは間に薄羽紙を挟み、動いて干渉して傷付けそうなものは薄羽紙で包むなど、資料の特徴を掴んで適切に梱包しなければ壊して大きな問題に直結してしまうため、神経を使う作業だった。

#### 【ガリバーウォーク オリジナル解説作成】

ガリバーウォークという、荒川大模型 173 を使った 40 分程度の解説を作成した。3 人のチームを組み、対象を決めて、事前に荒川について予習をしていたことを話し合いながら解説を作成した。対象を小学 5 年生に設定していたので、内容は授業で習ったことの復習ができるクイズを内容に入れ、聞き取りやすいようゆっくり抑揚をつけて話すなどの工夫をした。しかし、いざ発表してみると時間を余らせてしまった。

他の班の発表では、対象を大学生に設定して各々の専攻を活かした専門的な話や、自分自身の経験の話、趣味で集めているものを持ってきて説明に使うなどしていた。

今回はきっちり原稿を作って発表に臨んだが、これを毎回対象に合わせて内容を変える臨機応変さと知識の引き出しの多さから、学芸員やボランティアの方の凄さを改めて実感した。

今回ガリバーウォークの解説や荒川の調査を体験して、川の博物館の教育普及事業がいかに充実している、その質の高い教育をするのがどれだけ大変なことかを学んだ。授業の座学で学んでいた事もこの博物館実習で実践して、学芸員の仕事の大変さ、楽しさ、責任の重さを実感することができた。



写真5 梱包の完成形



写真6 ガリバーウォーク発表の様子

---

## 狭山市立博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 齋藤 虹輝

私は、2022年9月4日から9月14日のうちの7日間を狭山市立博物館にて実習させていただいた。狭山市立博物館は「入間川と入間路—その自然と風土—」を基本テーマとして、そこで生まれ生活と文化を築いた人々の足跡にスポットをあて郷土色の強い構成を意図している。

実習させていただいた7日間では、受付体験、バックヤード見学、展示の片づけや準備文化財の扱い方などを通して学ばせていただいた。また、他の大学から4年生5人と共に実習を行った。

実習初日では朝礼があり一日の流れと実習全体の予定を説明していただいた。その後、常設展と企画展の監視を行った。利用者はマナー良く見学しており、特に問題はなかった。次に奈良時代をテーマとした工作教室を考えるミニ課題を行った。予算を計算しながら工作物を考えるのは思っていた以上に難しかった。午後からは受付体験を行った。実際に利用客との接客を行う業務でチケットや物販の会計のレジ打ちをした。この時博物館で業務していくにはかなりマルチなスキルがいると感じた。

2日目は夏季企画展の片づけと秋季企画展の準備、バックヤードの見学を行った。企画展の片づけは、実際に展示物を収蔵庫にしまう作業で文化財を触るため非常に緊張したが、無事に片付ける事ができた。

秋の企画展の準備は展示に使う備品の運び込みを行った。かなりの力仕事でパワーのいる業務であると感じた。午後からはバックヤードの見学で非常設備をメインに館内の案内をしていただいた。博物館では文化財を守るため火災が起きた際は水ではなくガスを使って鎮火するということを教えていただいた。

3日目は作業場の見学や収蔵庫の見学、彫刻の展示、資料の取り扱い方を学んだ。作業場の見学では最近見つかった田口保明著の書物の掃除を行った。燻蒸したあとで虫やほこりなどのごみを落とす作業であった。実際に文化財を触るという事で緊張したがうまく作業することができた。収蔵庫の見学では、実際に収蔵庫の中に入れていただき、夏の企画展で使われた資料をもとの場所に戻しつつ見学を行った。本館以外に小学校の空き部屋や環境センターにも収蔵していることを聞きかなりの数があることに驚いた。彫刻の展示は2つの彫刻を大きなガラス展示ケースに展示することであった。6人全員で相談しみんなが納得した置き方で展示をすることができた。午後からは資料の取り扱い方を学んだ。真剣(刀)の組み立てと解体を行った。真剣は刀身が特に重く安定して持つのが難しかったが、組み立てと解体について教わった通り行い危なげなくスムーズにできた。

4日目は梱包の仕方、常設展示の解説練習を行った。梱包の仕方については茶碗や書物についての梱包の仕方を学んだ。茶碗については実際にやりながら説明をしていただいた。茶碗は薄葉紙で包み付属の箱に詰めていった。箱については、箱に合わせて採寸しカットした段ボールを作った。4面と3面の2つを作りそれを展開図のように組み立てて薄葉紙をひもにして結んで梱包した。午後からは次の日に行う常設展示の解説の練習をした。私は、アケボノゾウとメタセコイアについての解説を担当した。下調べや話すペースを考えた。また、自分のコーナーの知識をつけるために調べ学習を行った。

5日目は常設展示の解説、企画展案の作成を行った。常設展示の解説では、4日目に練習した本番であった。実習生と館の職員の前で自分の担当のコーナーについて解説した。用意された時間は10分から15分であったが、私は15分ピッタリで解説することができた。解説の内容をもう少し煮詰めて目玉であるアケボノゾウについての解説が濃いとよかったと講評をしていただいた。午後からは最終日に発表する企画展案についての資料を作成する時間であった。テーマと展示構成についてパワーポイントでまとめることを行った。狭山市に関連するものということでテーマを決めるのが難しかった。

6日目は秋季企画展の準備と企画展案の作成をした。秋季企画展の準備は、2日目に行ったものの続きでアクリルケースの洗浄と照明のセットを行った。アクリルケースは傷がつきやすいとのことで丁寧に洗浄し傷をつけることなく無事に洗浄できた。照明のセットは光量の調整のためライトにカットしたテーブルクロスかぶせることをして調整した。企画展案の作成では、前回の内容をより濃くし全体的に形になるくらいの進捗具合で終え、残りを自宅で進めることにした。

7日目の最終日では企画展案の発表、図書室の整理を行った。企画展案の発表では、私は「入間川物語一人と川とのこれから」というタイトルで入間川に関する舟運や治水工事など川との関わりをテーマとした。あまり時間がなく綺麗にまとまらなかったのが反省であると考えている。舟運について特化させるなどをして時代の流れを展示する形の方が一貫性があると感じた。午後からは図書室の整理を行った。今後図書室を開くとのことで本棚の整理と移動を行った。かなりの力仕事であり、3時間かかった。私は体力に自信はあったが、博物館で働く際はさらに体力をつけるべきであると感じた。

こうして7日間の実習を終えた。非常に充実しており、実習後は一段階成長していることを感覚では

あるが実感できたと思う。博物館では、様々な業務を行うことを身をもって感じ違う分野でも必ず役に立つ体験であったと感じた。こうして実習をさせていただいたことに深く感謝を申し上げる。



写真7 実習生と受付体験練習



写真8 梱包した茶碗箱

---

### 〈歴史博物館での実習〉

東村山ふるさと歴史館／八国山たいけんの里

メディア情報学部メディア情報学科 4年 吉田 奈央

私は7月27日から8月12日までの休みを除いた10日間を、東京都の東村山市にある東村山ふるさと歴史館及び、八国山たいけんの里で博物館実習をさせて頂いた。東村山市は、古代の「東山道」中世の「鎌倉街道」を軸に特徴ある歴史があり、これらを反映した文化財が残されている。そのため、ふるさと歴史館では文化財保護や歴史資料の収集を進め、東村山の歴史に関わる展示を開催している。また、八国山たいけんの里では、平成8年に発見された下宅部遺跡の資料が展示されている。下宅部遺跡は、たいけんの里西側500mほどの多摩湖町にある遺跡で、現在は下宅部遺跡はっけんのもりとして、一部が地下に埋設保存されている。このような関係からさまざまな考古体験、講座、展示解説を行い、たいけんの里が八国山のふもとにある北山公園内にあることから、自然観察会や自然素材を利用した体験等を開催している博物館である。

実習初日から私たち実習生には7月31日に行われる「れきしかん夏まつり」に向けての準備が任せられた。実習前の説明会にて事前に実習生が運営するコーナーの案を考えるように連絡があったため候補には困らなかったが、初日であることや、顔合わせ、自己紹介は行なったものの、殆どが初対面に近いため意見や質問を言うのに躊躇ったり、何処かぎこちないものであった。しかし、担当するコーナーの内容

が決まり準備期間中に行う作業や必要な材料を確認してからは、スムーズにことを運ぶことができた。私たち実習生が考えたコーナーは「釣って！釣って！ひがしむらやま」と題した、歴史館にある文化財などを魚に見立てそれを釣ってもらおうというものである。釣りのルールや、景品である文化財の写真とその説明が書かれた葉。他にも竿の長さや飾り付けなど、4日間の準備期間で多くの試行錯誤を繰り返した。

当日はトラブルもなく私たち実習生のコーナーは多くの子どもたちに楽しんでもらえた。また東村山市の公式キャラクターである「ひがっしー」の中に入ってキャラクターとして来館者と写真撮影など普段できない体験も出来た。「れきしかん夏まつり」を通して企画・運営の大変さを学んだ。また、この「れきしかん夏まつり」の準備を実習の後半で行えば、初日に多くの意見が出て気まずい雰囲気にならなかったのではないかと思う反面、前半に行くことにより、初対面でチームとして何かを成し遂げる大変さを学ぶことができたのではないかと思った。そして、ひとつのことをチームで達成することで実習生の仲がより深まったのではないかと考えた。

後半の実習では各専門分野の講義や学芸員の仕事体験が中心だった。一日だけではあるが、八国山たいけんの里で麻の皮剥ぎや、表皮を削ぎ落とす作業など博物館の名の通り、体験しながら学ぶことができた。また実習最終日には、これまでの実習の集大成となる展示説明を行った。ふるさと歴史館にある展示資料の中から自分で説明する資料を選び、資料に関する文献を調べまとめた。午前と午後の計2回説明をしたが、最初はメモから目が離せず下を向いたままの説明となってしまった。2回目の説明では1回目の失敗を活かし説明を聞いている周りを意識しながら行うことができたが、やはりメモに頼ってしまった。普段来客者に対し展示説明をしている学芸員の凄さを改めて実感した。

他の実習生と違い私の専攻分野は歴史や民俗ではないため民俗資料の洗浄や古文書のはたき作業・表題とりなど、どれも新鮮で貴重な体験であり、学芸員の仕事を実際に見て体験するととても充実した期間だった。今回の実習を通しチームワークの重要さや、相手に伝えることの難しさ、理解してもらう為の言葉選び、見つかった課題を改善する大変さなど多くのことを学んだ。この10日間の実習で体験した経験は今後社会に出たときに役立てると思っている。

最後になるが、多忙な中貴重な時間を博物館実習の時間に充てて下さった職員の方々、実習を受け入れて下さった館長さんに心から感謝申し上げる。



写真9 れきしかん夏まつりの様子



写真10 麻の皮剥ぎ体験

---

## 〈郷土博物館での実習〉

飯能市立博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 宇井 一輝

今回私は、8月3日から8月10日までの月曜日を除く7日間飯能市立博物館において館園実習をさせていただいた。飯能市立博物館は、平成30年に飯能市郷土館をリニューアルの上開館した郷土博物館である。常設展示は飯能の里・町・山のゾーンに分かれた歴史展示室、飯能の特産である西川材を使った製品などを展示する飯能と西川材コーナー、飯能河原や天覧山、多峯主山の自然に着目した身近な自然コーナーの3つを中心とした展示を行っており、飯能地域における歴史博物館としての役割と、天覧山のビジターセンターとしての役割を担っている。

実習初日は、主査の引間学芸員から飯能市立博物館の現状と運営方針について講話をいただいた。コロナ禍の中で博物館として行える事業に制限が出ているが、その制限を徐々に緩和して出前授業や講座などを再開しているのが現状ということであった。また、引間さんは博物館以外にも市役所の部署に勤務していたことがあり、博物館の外から見た博物館像を聞くこともできた。その後、実習担当の波田学芸員の案内で館内の見学を行った。館内の導線や展示手法など率直な意見交換を行うことができ博物館の課題について理解を深めることができた。

2日目・3日目は博物館主催の夏休みきつとす子ども教室「飯能 山のくらし・川のくらし」の準備と補助を行った。2日目の準備では飯能河原まで実際に下見を行い、講座の運営を行う上で危険になる箇所がないか、当日の動き方などについて確認を行った。同時に環境調査の実習も行い、飯能河原ではどのような生物や植物を見ることができるのか見るだけでなく鳴き声なども聞いて調査票への記録を行った。講座当日となる3日目は、子どもたちと一緒に川に入り箱メガネでの水中観察や実際に採集を行う補助を行った。参加者全員に事故やケガもなく盛況のうちに開催できた一方で、夢中になるあまり本来の観察予定地ではない場所が中心となってしまった点など反省点もあり、子どもたちへの声掛けの難しさも痛感した。

4日目・5日目は資料整理の実習として、倉庫に保管されて手つかずのままとなっていた赤田家文書のナンバリングとExcelを用いたデータベース化を行った。赤田家文書は、飯能市の市職員や、作家、歌人など幅広く活動していた赤田健一（筆名：喜美男）氏が収集していた資料である。その内容は直筆の原稿や新聞の切り抜き、古地図、健一氏の同級生で飯能市長にもなった小山誠三氏との書簡などその内容は多岐にわたっており、資料点数は300点を超えた。フラットファイルを一冊ずつ開いて内容を確認する作業は大変ではあったが、興味関心のある出来事に関する資料も豊富に含まれており自分の知見を広げる絶好の機会でもあった。また、発行年数の書かれていない地図を記載された道路や路線の開通状況、建物の有無などから年代を特定する作業は非常にやりがいを感じた。作業に取り掛かる前は雑多に積み上げられたファイルでしかなかったものが、整理を行うことで資料としての意味や価値を持つも

のに変化するアーカイブ化の過程を自分の手で行う貴重な体験をさせていただいた。

6日目は整理した赤田家文書の報告書作成と企画展示要項の作成を行った。報告書では、収集された資料の内容だけでなく、健一氏や赤田家に関する内容を執筆し2日間の資料整理の成果をまとめた。展示要項作成では、整理を行った資料をどのようにすれば魅力あるものとして展示できるのか討論を行った。同じ資料を扱う展示でも展示内容によって中心的な資料にするのか、あくまで補足的な資料として使うのかなど考える必要があり、様々な角度から検討や討論を行うことで展示の骨子が組み上げられていくのであると感じた。

最終日は尾崎館長から実習で行えなかった部分の補足説明と博物館の今後のありかたについて講話と意見交換を行った。これからの博物館運営にはこれまでの地域住民や地域社会からの理解・協力だけでなく若い世代の取り込みが不可欠ということで、デジタルデバイスを活用した広報や博物館に来たくなるような施策について提言させていただいた。

短い期間ではあったが、博物館の中心事業に触れることができ、有意義な実習を行うことが出来た。今回学ばせて頂いたことを通して博物館に対してより理解が深まったと同時に、将来にも役立てていきたいと思う。

むすびに、お忙しい中私たち実習生に時間を割いていただき貴重な体験をさせていただいた博物館職員の方々に改めて御礼と感謝の意を伝えたい。



写真11 講師の方から採集した生き物の説明を受けている様子



写真12 赤田家文書資料整理の様子

---

飯能市立博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 宮崎 真美

私は8月3日から8月10日、休館日を除く計7日間飯能市立博物館で実習を行わせていただきました。飯能市立博物館は1990年に飯能市立郷土館という名称で開館し、2018年に新たに飯能河原と天覧山

周辺のデジタルセンター的機能を追加し、リニューアルオープンした登録博物館です。常設展示は歴史展示室と身近な自然コーナーに分かれています。歴史展示室は里、町、山、飯能今昔の4つに分けられています。この展示は最新の情報や知見を反映しやすいように展示替えが安易な構造となり、常に更新される展示を目指して取り組みが行われています。身近な自然コーナーでは博物館へ訪れた来館者に飯能河原や天覧山、博物館周辺の自然の魅力を伝える為分野ごとに生息している生物を紹介しています。

実習では、夏休みきつとす子ども歴史教室の体験学習の準備と補助、赤田家資料整理と報告書、展示要項の作成を行いました。

実習1日目はオリエンテーションと講話、館内の見学と批評を行いました。講話はきつとすレポートを通して飯能市立博物館の成り立ちから現代までの取り組みについて聞くことができました。リニューアルを行ったきっかけや実際にリニューアルを行う上で苦労したこと、またきつとすがどういった経緯で名付けられたのかを知ることができました。また、博物館の愛称を募集するにあたって他県から寄せられた案の多くは、から始まるものばかりで飯能市の知名度がまだそこまでではないことが分かりました。館内の見学と批評では館内全体を見学し、一般の来館者が入ることができない所蔵庫も見学することができました。見学を通して、博物館は資料を収集、保管する場所の確保をすることができても展示や体験学習のための必要な備品を収納する場所には困っていること、展示を行っているのは人間であり完璧に見える展示であっても鋏を持っている人間の展示で手にしている鋏がずれていて横に置かれていたり、展示パネルの紙が寄っていて読みにくくなっていたりしていたりと博物館が抱えている課題を知ることができました。

実習2日目では夏休みきつとす子ども歴史教室の準備、3日目では補助を行いました。準備では午前中の中に体験学習を行う飯能河原で危険な場所がないか確認して打ち合わせを行い、午後には受付会場の設置と資料の作成を行いました。打ち合わせの際にはコロナウィルス感染症の対策と実際に行う際に気を付けるべきこと、子どもたちが持ってきた箱眼鏡を入れる袋をどうやって風に飛ばされず持ち帰ることができるのかなどを話し合いました。それでもいざ当日を迎えてみると子どもたちは私が想像していたよりもずっと元気で、打ち合わせの際に考えていなかった体験学習を行う浅瀬から本流の方へ向かってしまう子どもがいた場合などのイレギュラーが発生したり、あまり接する機会がなかったこともあり子どもたちとはどういった距離感で接すれば良いのか戸惑いました。実際に準備と補助を行ってみて、どれだけ綿密な打ち合わせを行って問題点や懸念点を潰しても実際に行ってみないとどうなるかは分からない難しさがあることが分かりました。また、体験後に行ったアンケートの結果で今回の体験学習の概要に沿った学びの場を提供することができたことが反省会で分かったので、来館者アンケートの重要性を改めて知りました。来館者の中でアンケートを記入する人はごく少数なので、これからもっとアンケートを記入してくれる来館者が増えるように取り組んでいく必要があると思います。

実習4日、5日目は赤田家の資料を整理しました。300点を越える資料の内容を確認して、得られた情報を記録する作業は始めた時は途方もない量に驚きましたが、段々整理をしていくにつれて整理を行っている人物がどのような仕事をしていて、また趣味はと分かってきました。資料の整理の面白さとは、不明瞭な人物を資料を通して理解し、人物像を鮮明にしていくことができるところなのではないかとの時思いました。6日目に資料を整理したことで得られた情報をまとめて提出する報告書を作成し

ました。私は赤田健一さんが出版した作品と、そこから見える交友関係についてまとめて作成しました。膨大な資料の中で私が報告する内容のテーマとして選んだ情報をどの資料から探すべきか迷いましたが、作成した記録を使って情報を収集しまとめることができました。

実習7日目は尾崎館長の講話を聞かせていただきました。お話を通じて現在博物館が行っている取り組みとそれに対する現状と評価について知ることができました。コロナウィルスの関係で今まで通りの活動ができなくなってしまった市民学芸員やサークルの参加者に対して博物館側からできることについて意見交換を行いました。市民学芸員の方もサークル参加者の方も高齢な方が多いので、もしもの場合を考えると企画をしても二の足を踏んでしまうと思います。それでもこうした取り組みについて考えて実行することで博物館は地域から認められ、必要な施設であると理解してもらわなくてはならないので向き合っていかなければならないと思います。

実習を通して、博物館は来館者だけでなく地域の人々全体にとって必要な施設であると示し続けていかなければならないこと、その為に常設展示だけでなく特別展示や体験学習などを行って学びを提供していかなければならないのだと思いました。また、取り組みに対してきちんと目的と目標を設定し、来館者やイベント参加者が明確に理解をして次へと繋げる為に方法を模索し、広い視野と知識で工夫していく必要があることが分かりました。

今回の実習は大学の授業だけでは理解すること、得られない体験でした。貴重な体験をさせていただいた分、これらを用いて社会に貢献することで活かしていく義務が私にはあると思います。

貴重なお時間を割いて実習をさせていただいたことを感謝し、7日間という短い期間ではありましたがその中で学ばせていただいたことを糧に一層の努力を行っていきたいと思います。



写真13 赤田家資料整理



写真14 報告書作成

私は、8月22日を除いた18日から28日の10日間、草加市立歴史民俗資料館にて実習させていただいた。草加市立歴史民俗資料館は、建物が大正15年に草加小学校の西校舎として建てられた埼玉県初の鉄筋コンクリート造りの校舎を再利用したものであり、平成20年には、国の登録有形文化財に認定されている。資料館としては、昔の暮らしに関する物や、草加の歴史に関する物についての資料が展示されている常設展と、草加と関わりの深いテーマや季節の行事に合わせたテーマに沿った内容を扱う企画展を行っている。地域に対しての取り組みとしては、近隣の小学校・中学校に対して社会科見学の受け入れや、資料を使った体験授業の実施、高齢者向けの講座の実施、企画展のギャラリートークの開催、蓄音機を使ったミニコンサートの実施というように、非常に多くの取り組みを行っている。

実習初日は、実習期間中に小学生の親子向けに開催される、藍染ハンカチづくりの体験学習を実習生が主体となって行うために、藍染の作り方と注意点について指導を受けた。午後は資料館での企画展の作り方についてと、教育普及事業についての講義を受けた。草加市立歴史民俗資料館は、国の登録有形文化財であることから大掛かりな工事などはすることが出来ないため、かなり限られた条件下で企画展を作っていかなければいけないということや、小学校の教室だった場所を利用していることで資料の保管を好ましい状態で行うことが難しいというお話があったが、そんな環境下でも地域資料館の良さを出来るだけ生かして短いスパンで企画展を行っているということは、簡単に出来ることではないと思った。

2日目は、資料カードの作成の仕方とデータベースを見せて頂いた。紙とデジタルの両方で登録を行っているが、最近ではほとんどデジタルのみの登録になってきているようだ。資料館で扱う資料はほとんどが地域の方からの寄贈のため、一度に大量の資料を登録しなければならなくなることもあるため、先に番号の登録をして、後から内容を修正していくことが多いということであった。例としてレコードのデータ登録の様子を見せていただいたが、情報が細かく項目ごとに分けられているため、情報の共有がしやすく後で簡単に調べられるなど、やはりデジタルでの管理は利点が多いと考えた。

3日目と9日目は、藍染ハンカチづくりの体験学習の補助を行った(写真15)。事前に予約されていた10組の親子に対して、藍染のハンカチの作り方を教えることと、タイムキーパーが主な内容だったが、小学生の子どもたちに対して分かりやすく内容を伝えるにはどうすればよいか考えたり、なかなかアイデアが浮かばずに手が止まってしまっていたお子さんに声をかけたりと自分から考えて自主的に行動していくことが求められる場面が多く、最初は緊張して上手くコミュニケーションが取れなかった。しかし、他の実習生と協力してお互いに声を掛け合うことで、何とかトラブルなく完成させることが出来た。一回目の反省点を生かして、9日目の2回目の開催では、時間をこまめに確認してスムーズに作業を進めることが出来た。本来草加の地場産業の一つを体験してもらうために行う体験学習であったが、難しい話が分からない小学生に合わせて、長い説明を省いてなるべく手を動かして体験してもらうことで、

楽しみながら学んでもらうということを実現していると思った。親御さんと一緒に参加する企画であったため、親御さんがお子さんのために実習生たちに説明を求めることもあり、親子で一緒に学びの体験を得るという素敵な時間を提供することが出来たと思う。

4日目、5日目、7日目、10日目は毎年9月ごろに行われる重陽の節句のミニ企画の展示スペースの設置とポスターの写真撮影、資料の展示を体験した。まず、職員の方からの講義で重陽の節句についての概要について学んだ。昨年度に行われた重陽の節句展の様子などについても教えていただき、自分たちなりのイメージを持って臨んだ。展示スペースは資料館の2階の階段を上がってすぐの廊下の角で、木のテーブルに赤い布を張って台を作成した。次に、実際に展示する雛人形と地域の方からお借りしている吊るし雛を組み合わせて、華やかになるような飾りつけの配置を考え、ポスター用の写真撮影を行った。重陽の節句の時期に行われる菊の着せ綿や菊酒を色々な道具を使って再現し、工夫を凝らしたものが出来上がった。撮影をする人と配置を変える人で助け合いながらより良い物が撮影できるように話し合いながら進めていくことが出来た。撮影が終わったら、最後に展示スペースを作る作業を行った。地域の方々が秋にちなんだ色々な吊るし雛を提供してくださったため、どのように置いたら一番良く見えるかということに注意しながら、全体のバランスを見て位置を調節していった。長い吊るし雛は棒状の土台に掛けて展示したが、固定している部分が見えないように他の飾りで隠してみるなど、全員で話し合いながら配置を考えていった。訪れた方が必ず通る場所での展示になるため、歩いている時の目線に合わせた配置を心掛けるなど、大学で事前に学んだ事も生かすことが出来たと思う。

6日目は、資料館の第二展示室の展示についてのディスカッションを行った。多忙な職員さんたちがあまり手を付けることが出来ていない地場産業のコーナーを実習生全員で手を加えるために、問題点を話し合った。展示物の配置を変え、説明パネルを作成して掲示した。説明パネルに載せる原稿やレイアウトを自分たちで考え、小さい子でも分かりやすい物を作るのに試行錯誤を繰り返しながら完成させた。

8日目は資料の取り扱いについての講義を受けた。資料館に保管されている掛け軸と刀剣を使用してその取り扱い方法について学んだ。掛け軸はまっすぐ均一に巻いていくには端と端をぴったりと合わせてずらさないようにするため初めてでは難しく、何度も練習してやっと出来ることであると実感した。刀剣の取り扱いについては（写真16）、手入れの仕方を教わると共に実際に手に持たせていただいた。初めて持つ刀剣はずっしりとしていて、刃文がとても美しかった。

10日間を通して、来館者の方々との交流から専門的な資料の取り扱いについてなど、様々なことをとても丁寧に教えていただいた。この実習を通して、自分から積極的に行動する力を養うことが出来たと思う。実習を受け入れてくださったこと、様々なことを学ばせていただいたことに感謝し、今後の学習に生かしていきたい。



写真15 藍染ハンカチづくりの様子



写真16 刀剣の手入れの様子

## =資料=

### 博物館実習協力館および受入人数一覧（過去3年間）

#### 【2020年度】

No.	所在	館種	2020年度実習協力館	実習人数
1	長野	歴史	長野県立歴史館	1
2	埼玉	郷土	飯能市立博物館	2
3	埼玉	総合	埼玉県立川の博物館	1
4	東京	歴史	古代オリエント博物館	1
5	東京	動物	(一般財団法人) 進化生物学研究所	1

#### 【2021年度】

No.	所在	館種	2021年度実習協力館	実習人数
1	栃木	総合	栃木県立博物館	1
2	埼玉	理工	さいたま市青少年宇宙科学館	1
3	埼玉	歴史	埼玉県立歴史と民族の博物館	1
4	静岡	歴史	富士山かぐや姫ミュージアム	1
5	東京	歴史	古代オリエント博物館	1
6	埼玉	総合	入間市博物館 ALIT	1
7	埼玉	郷土	飯能市立博物館	2
8	埼玉	総合	狭山市立博物館	1
9	栃木	理工	栃木県子ども総合科学館	1

#### 【2022年度】

No.	所在	館種	2022年度実習協力館	実習人数
1	埼玉	総合	入間市博物館 ALIT	1
2	埼玉	総合	埼玉県立川の博物館	2
3	埼玉	総合	狭山市立博物館	1
4	埼玉	歴史	東村山ふるさと歴史館／八国山たいけんの里	1
5	埼玉	郷土	飯能市立博物館	2
6	埼玉	郷土	草加市立歴史民俗資料館	1

## 2022年度 資格課程修了者

### [司書課程]

法学部  
法律学科  
波平 恭

心理学部  
心理学科  
大坪 未紀  
譜久 村光

### メディア情報学部 メディア情報学科

赤塚 里奈  
有田 蒼馬  
生井 千晴  
石井 悠悟  
大澤 理子  
大城 美夏  
太田 蒔子  
金澤 真仁  
鐘江 優斗  
川田 優理香  
小棚 木佑也  
齋藤 虹輝  
佐々木 翔大  
佐藤 妃奈  
佐藤 玲  
鈴木 一成  
高倉 優海

高田 穂高  
竹村 明日香  
田尻 真奈美  
富澤 佑司  
鳥山 資生  
長山 由依  
原田 颯人  
藤澤 希望  
古谷 明李  
宮崎 真美  
森下 大地  
屋代 新二  
柳澤 光  
吉田 奈央  
吉田 凜之介  
吉野 翔真  
渡邊 愛矢

計 37 名

### [学芸員課程]

経済経営学部  
経済経営学科  
松田 拓海

心理学部  
心理学科  
浅川 弘佳

### メディア情報学部 メディア情報学科

宇井 一輝  
金澤 真仁  
齋藤 虹輝

宮崎 真美  
吉田 奈央  
他 1名

計 8 名

## 司書課程科目担当教員一覧（2022年度）

### 《専任》

[教員名]	[担当科目]
青野 正太	図書館情報学／図書館制度・経営論／情報サービス論
石川 賀一	生涯学習論／図書館サービス概論／情報資源組織論／ 情報資源組織演習Ⅰ／情報資源組織演習Ⅱ
岩熊 史朗	コミュニケーション論
狐塚 賢一郎	生涯学習論
寺嶋 秀美	情報処理概論
野村 正弘	生涯学習論／デジタル・アーカイブズ論

### 《非常勤講師》

[教員名]	[担当科目]
清野 愛子	児童サービス論
河野 剛彦	歴史資料論
篠塚 富士男	図書館情報技術論／情報サービス演習Ⅰ（基礎）／ 情報サービス演習Ⅱ（発展）／図書館情報資源概論
三澤 勝己	図書館総合演習

## 学芸員課程科目担当教員一覧（2022年度）

### 《専任》

[教員名]	[担当科目]
石川 賀一	生涯学習論
伊藤 雅道	環境生物学Ⅰ／環境生物学Ⅱ／生命の科学Ⅰ／生命の科学Ⅱ
海老澤 豊	歴史学Ⅱ
大久保 博樹	音響メディア論
大森 一宏	経済史Ⅰ／経済史Ⅱ
岡田 安芸子	日本文化論Ⅱ
木塚 隆志	西洋文化史
黒田 基樹	歴史学Ⅰ
狐塚 賢一郎	生涯学習論
竹内 俊彦	マルチメディア論
寺嶋 秀美	ネットワーク構築論
野村 正弘	生涯学習論／博物館資料保存論／博物館実習Ⅰ／博物館実習Ⅱ／ デジタル・アーカイブズ論／地球科学
長谷 憲一郎	映像メディア論
福島 大我	歴史学Ⅱ
増田 珠子	歴史学Ⅰ
村越 一哲	アーカイブズ学
本池 巧	現代自然科学Ⅰ／現代自然科学Ⅱ

### 《非常勤講師》

[教員名]	[担当科目]
枝川 明敬	博物館経営論
尾崎 泰弘	博物館資料論
河野 剛彦	歴史資料論
白石 行広	データベース設計論
杉山 正司	博物館概論／博物館情報・メディア論
丹治 清	博物館展示論
張 大石	文化人類学Ⅰ
羽田 武朗	博物館教育論

駿河台大学 資格課程 年報 第 23 号

発行日 2023年4月30日

発行 駿河台大学 資格課程

〒357-8555

埼玉県飯能市阿須 698 番地

TEL 042-972-1110

